
血盟の騎士(サーヴァント)

朝露

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

サーヴァント
血盟の騎士

【Nコード】

N97440

【作者名】

朝露

【あらすじ】

俺はあの日、ビルの屋上から飛び降りて死んだはずだった。なのに、目を開けるとベッドの上で。

「夢オチ!？」結構頑張ったのになあ。

そんな普通と言うには若干の躊躇いがある主人公と、見た目は10歳、中身は〇〇歳!な吸血鬼が送るラブコメ!! (になる予定)

序章一 A Prologue

side…○○

今日は朝から雨が降っていた。なのに俺は今、ビルの屋上にいる。しかもフェンスを乗り越えた小さなスペースだ。俺はこれから飛び降りようとしている。言っておくが、いじめを受けたとかそんなことで飛び降りるわけではない。自分の精神はそんなにか弱くはないと自負している。では何故そのようなことをしようとしているのかと言うと、こんなことを言えば怒られるとは思うが、生きている事がつまらなくなったのだ。それだけで？などと言われるだろうが、俺にとっては大問題だ。なんのイベントも起こらない平々凡々な人生なぞ生きていても仕方が無いと思ってもしようがないだろう？まあこれも失礼に値するだろうが。人の価値観だと思っておいてくれ。案外長々と話していたな。高所恐怖症ではないが、緊張しているのだろう。死ぬのに緊張しない奴なんじゃないだろうからな。とにかく中途半端だとは思うがこれでさようならだ。

・・・う・・・なんだ？・・・目の前が赤いぞ？・・・まさか・・・俺はまだいきているのか！？・・・以前からタフだ、タフだとは言われていたがまさかこれほどとは！・・・ああ、やっと・・・頭の中が・・・霞んできた・・・

パシヤツ・・パシヤツ

誰か来たのか？・・・こんなところに遭遇するなんて・・・

「・・・を・・なさい・・・・・・・・」

「・・・イ、ミ・・・・・・・・」

・・・も・・・ダメだ・・・

side..○○

まさか、雨の日の散歩であんなところに会うなんてね。長く生きてると人生何があるか分からないわ。

「・・なにしてるのかしら？」

「飛び降りルヨウデアリマス。ドウナサイマスカ。」

「冗談でしょ！？お腹も空いてないのに死にかけの血なんて飲まないわ」

あら、飛び降りたみたいね。

ドンッ！！ ビシャッ！！

結構な量の血が吹き出たみたいね。私は庇われたからかからなかったけど。即死かしら。

ピクッ

「まだ生きてるの？ よっぽど運が良いのか、頑丈なのかしら」
「ドウスルノデアリマスカ？」

こんな面白い人間をこんなところで死なせるのも勿体無いわね。

「・・・この人間を屋敷に運びなさい。私の騎士にするわ」
「ハイ、我が主人様。」

さあ、これから何が起こるのかしら。愉快な事なら良いけど。

第1部 騎士と吸血貴族 1話目―The First―

side..〇〇

・ん・ここは・・・？・・・知らない天井だ。・・・なんてな。
言ってみたかったんだよねあゝ。

「・・・・夢オチ？・・・」

なんだそれ！？俺、案外頑張ったんだぞ！？なのに・・・夢オチって・
・

「夢じゃないわよ」・・・は？

「誰だ？」

「チエルシー。チエルシー・ローレンスⅡビュー」

？はて、俺にそんな片仮名の名前の知り合いなんぞいただろうか。
少なくともどっかのラノベみたいな名は、聞いた事がない。しかも
みたところ10歳ぐらいだ。俺に妹はいなかったはずだから、こん
な年齢の知り合いはいない筈だ。変な嗜好も無いし。・・・自分の
知る限りでは。

「チエルシー？俺の知ってる奴か？」

「いいえ、違うわ。私は貴方の名前も知らないもの」

「じゃあ、なんで・・・」

「貴方が飛び降りたときに、私は貴方の下にいたのよ？庇って貰わ
なかったら顔も服も血みどろだったわ」

「それは、悪かったけど・・・」

「でも、貴方は死ななかつた。驚いたわ、まさかただの人間にそんなことが出来るなんて」

「・・・自分が人間じゃない、みたいな言い方だな」

「ええ、だって私【吸血鬼】だもの」

「・・・へ？」

「お前、何言って」

「それでね、貴方を騎士にしたら面白いと思って」
サーヴァント

「人の話聞けよ！・・・何だって？サーヴァント？」

「ああ、NOは聞かないわよ。もう遅いし」

「もう遅いって、どうゆうことだよ！？」

「貴方、鏡みたの？」

「鏡？」

「ああ、そうだったわ！此処には鏡が無かつたわね。しずり、鏡を持てきなさい」

「ハイ、ワカッタノデアリマス」

しずり・・・人の名前か？声は女の子のだったし。

しばらくすると、この洋風な部屋には似つかわない着物を着た女の子が手鏡を持ってきた。手鏡の中に映る自分を見ると、そこには濡れ羽色とまで言われ男からはからかい、女からは羨望を受け続けてきた漆黒の髪・・・ではなく何故か光を浴びて若干眩しい金色の髪が・・・

「なんでさ！！！？」

「ウチの一族全員が髪が金色だったからどうなるかと思ったけど。」

まさか、髪の色が変わるなんて」

「知らなかったのか!？」

「サーヴァント騎士を創ったこと自体が初めてだもの。良かったわ、髪の色が変わるくらいで」

「まさか、失敗してたら・・・」

「人型じゃなかったかもしれないわね」

・・・ああ、目の前が真っ暗に・・・

2 話 目 ― The Second ―

side..Chelsy

バタツ・・・

あら、急に倒れてしまったわ？

「どうしたのかしら？」

「気絶シテイルノデアリマス。先程ノ我ガ主人様トノ会話ニ精神的
ショックヲ受ケタヨウナノデアリマス」

「まあ、人間って本当にか弱いからねえ。私がそんな失敗をする訳がないのに。しずり、この人間が起きたら呼びなさい。それまで部屋にいるわ」

「我ガ主人様？」

「少し眠るわ。まったくこの身体も不便ね、夜更かしも出来ないなんて」

「オヤスミナサイデアリマス」

「ええ、おやすみ」

まったく、起きたらまず・・・

名前を聞かないと……。

side..Shizuri

ワタシハ、人形。主ニ逆ラウ事ナド、アリ得ナイノデアリマス。ソ
レデモ驚イタ。アノ我ガ主人様ガ人間ヲ騎士ニスルダナンテ。デモ、
主ガ決メタ事ダカラワタシニ出来ルノハ、セメテコノ人間ガ起キル
マデ待ツ事ダケナノデス。

ワタシハ、我ガ主人様カラ自分ガ東洋、特ニ日本ト言ウ国ノ人間ニ
似セテアルタイプダト聞イテイタ。コレマデ中国人ハ見タコトガア
ツタガ、日本人ハ見タ事ガナカッタノデヨク見テミル。

ナルホド、確カニワタシト同ジヨウナ我ガ主人様トハ違ウ低イ鼻ニ、
黄色ガカッタ肌、色ハ変ワツテシマッタガ、少シモ他ノ色ガ混ザッ
テイナイ漆黒ノ髪。主ホドデハナイガ興味ガワイタ。

・・・早く、目覚メレバイイノニ。

3話目―The Third―

side..Chelsy

結局あの人間が目覚めたのは、次の日の夕方だった。

やっとキチンと状況を理解させられる。何時間も待たされた事に苛立ったことも事実だが、そうなる事を考えなかった訳ではない。相手はただの人間。私のような存在など、それこそ幻想の世界にのみ存在する類たぐいのものだろう。キャパシティがオーバーしても責めようがない。

それよりも私のなかの好奇心、探究心が膨れ上がってどうしようもない。先ほど私を呼びに来たしずりの様子もおかしかった。付き合いは長いが、今まで殆ど感情を表に出した所など見た事がないはずのあの子があんなに愉しそうだなんて・・！！

どうでしょう・・ますます興味が湧いてきたわ！こんな感情を持つなんて何年、いえ何十年ぶりかしら。人間がこの屋敷にいること自体、お婆様が生きていらした頃以来だもの。

本当はとても興奮していたのだけど、まさか子供のようにいきなり質問を投げかけるなんて出来ないわ。

「ようやくお目覚め？夜行型の吸血鬼でも1日中眠っている事なんて殆どないわよ」

あら？こんな事言うつもりなかったのに。よほど動揺してるのかしら。

「・・・ゆ、夢じゃなかった・・・のか・・・」

「ええ、もちろん。ここは、貴方の夢の中の世界ではないし、ましてや天国や地獄なんかでもない。紛れも無い現実」

「じゃあ、俺は」

「そう。貴方は、ビルから飛び降りた。それを見つけた私が、死に掛けていた貴方をこの屋敷に運んだ」

「じゃあ、ここは病院か？」

「そんな訳ないでしょう？いくらビルから落ちても息があったからって人間の医者が見たところで、もって1時間よ」

「だよなあ。って待てよ！それなのに俺は生きてるのか！！？傷も塞がってるみたいだし！よくみたら髪の色違うし！・・・あれも夢・

・じゃ・・・ないのか？」

「あれ？ああ、貴方を騎士サーヴァントにしたってこと？」

「まあ、それもだけど・・・えっと・・・その・・・」

「！私が吸血鬼ってこと？」

「ホントなの・・・か？」

「もちろん。なら、証拠を見せましょうか？」

「しよ、証拠って・・・ま、まさか・・・」

「丁度お腹も空いてきたし、証拠も見せられるしで一石二鳥でしょう？」

「だからって！！お、俺っ、け、献血もしたことないっ！」

「だいじょうよ。まさか、致死量まで飲む訳じゃないもの。多少貧血になるくらいなもの」

・・・たぶん。

「おい！！今、余計なこと考えなかったか！？」

「気のせいよ。いい加減に覚悟を決めなさい」

side…○○

「いい加減に覚悟を決めなさい」

そう言って、吸血鬼を名乗る少女は俺の首元に口を近づけ・

動きを止めた。

「な、なんだ!?!」

やめたのか!?!

「また忘れるところだったわ・・」

「なにを!?!?!」

できるなら、この行為を忘れてくれ!!

「貴方がまた、倒れたりしたら何時間もまた待ちぼうけよ!」

「だから、なにを!?!」

「名前よ! 貴方の名前!?!」

「だから!・・・は? 名前?」

「そうよ! そのために待ってたのよ!」

「待たせる原因を作ったのはお前だろ!?! ってか、名乗ってなかっ

たっけ？」

「そうよ。貴方との会話の中に貴方の名前らしき固有名詞は、あいにくと出てこなかったわ」

名前、なあ……。まあ、適当に言っとけば・

「言っておくけど、嘘なんて言ったら干からびてミイラになるまで吸い尽くすから」

「げえ……」

「当たり前よ。嘘は大嫌いだもの」

「ったく、しょうがないな……」

「始めから素直に言えばいいのに」

「あんまり好きじゃないんだよ……」

「いいから、教えなさい」

「はあ……。雨梅^{あめ}、小嵐^{こがらし} 雨梅^{あめ}」

「あめ……。貴方……。自分の名前があめだから雨の降ってた日に死のうとしていたの？」

「そんな訳ないだろ！ただの偶然だよ」

「……この世に偶然なんてないらしいわよ？」

「はあ？……詳しいな、お前」

「結構長く住んでいるもの」

「さあ、心の準備は出来たわね？あめ」

「うう・・・」

あのまま忘れてくれたら良かったのに・・・

「痛いなんて一瞬よ」

「注射みたいだな・・・」

「まさか、苦手なんて」

「バカ言え」

こんどこそ首元に口を近づけてきた。口の中に牙が2本見えて、あ、あれを刺すのか……。なんて、自分でも不思議なほどリラックスしてて。何やってんだ、俺。なんて自己完結を心の中でしていたら、いきなり口を近づけるスピードを速めてきて、

ガッ！「いっ・・・」

ジュルッ「・・・ぐあ・・・つつ・・・」

それから多分1分間ぐらい吸われ続けたけど、俺には10分ぐらいに感じてようやく、

キュポンッ、チュルッ「ごちそうさま、おいしかったわ。私の目に狂いはなかったわね」

・・・せめて、狂っていてほしかった・・・

血が足りないせいか、頭が上手く働かない。

そういえば、血を吸われてたときって結構シユールだよなあ……。高校生が小学生に首筋に噛み付かれてるんだもんなあ……。しかも、高校生は喘ぎ声みたいな声で……。って、俺じゃん!!!
う……。っわあ……。やっべえ……。すっつげえ死にたい……。

「ねえ、だいじょうぶなの？」

「ああ、今なら鳥になれる気がする……」

「本当にだいじょうぶ!!?」

「でも、まあ条件はクリアね。当然だけど」

「条件？サーヴァント騎士ってヤツのか？」

「そうよ。すぐく細かく決める吸血鬼もいるみたいだけど、私はそんなにこだわりはないから。だいたい3つね」

「3つもあるのか？」

「とはいえ、私あんまりその中の1つはどうでもいいから。実質は2つね」

「いいのか？」

「だって、要は気に入ったのを騎士にサーヴァントしたいけどちょっと心配だから確かめておこう、って感じですよ」

「ずいぶんと軽いんだな」

「暗黙の了解よ。守るほうが少ないけど」

「というか、俺がなることは決まってるんだな」

「あら、今更ね」

「事後了承だけだな」

「早くしなかったら貴方が死んでしまったもの。それに、行くあてはあるの？」

「・・・ったく・・・分かったよ、騎士サーヴァントになってやるよ」

「ああ、騎士サーヴァントを持つ吸血鬼は、その騎士サーヴァントの血液のみを摂取することが盟約だから」

「・・・は？」

俺の第2の人生は相当に前途多難らしい。

4話目―The Fourth―

side…Ame

「あ、そういやその条件って結局何なんだ？クリアしたって言われ
ても条件が何か分からないんじゃないじゃ実感湧かないし」

「・・・聞くほどのものじゃないわよ？今じゃほとんど廃れている
から」

「なんか、そういうの聞くとちょっと気になってくるんだけど」

「まあ、隠すことではないからいいけど。・・・条件が3つある事
はさっき話したとおり。1つ目は、何か特出すべき能力を持っている
ること」

能力？そんなもの持ってないはず・・・

「あめで言えば、その身体の頑丈さ、ね。さすがに吸血鬼^{わたし}たちでも
あの高さから落ちて生き残るなんてほぼありえないわ」

「・・・・・・・・ですよね。自分でもビックリだし。

「で、それがお前の目に留まった訳か」

「・・・不満そうね」

「別にそうじゃない。ほら、次の条件はなんだ？あと2つあるんだ
ろ」

「2つ目は、血が自分好みの味だってこと。これは結構重要ね、吸
血鬼は騎士^{サーヴァント}から血を吸わないといけないもの」

「へえ、ちゃんと決まってるんだな。俺、吸血鬼って手当たり次第
に襲うんだと思ってたよ」

「ほとんどそんな事しないけど、たまにいるわね。・・・ゲテモノ
食いが」

「ゲテモノって・・・女の子がそんな言葉使うなって」

「事実なもの」

「だからって、・・・まあ、いいや。3つ目ってなんだ？どうでもいいって言ってたヤツだよな」

「・・・・・・・・」

あれ？急に黙り込んで・・・うわっ！な、なんだ、急に顔がっ！

「お、おいっ！大丈夫か！？なんか赤いぞ？」

「なんでもない！平気よ」

「本当か？てか、3つ目ってそんなに酷いのか」

聞かないほうが良かったかな？

「・・・・・・・・よ・・・・・・・・」

「ん？なんか言ったか？」

「だから、・・・・・・・・よ・・」

「？よく聞こえないぞ」

「だから、・・・好みのタイプよ・・」

・・・それって・・・

「あ、私は違うわよ！？普通は、ってこと」

「だ、だよなあ。小学生に好かれても・・・」
「・・・・・・」

あ、あれ？なんかデジャヴ？

「・・・・・・」

「あ、あの・・・チェルシーさん？真っ黒いオーラが見えるんですけど・・・」

「・・・あめ」

「はいいい！」

「私が小学生だと思っていたの？」

「え、いや、だってそうとしか見え」「もう1回あのビルから落ちるのと、ミイラになるのどっちがいい？」「ごめんなさい、すいません、許してっ！」

・・・MS5！（マジで・死ぬまで・5秒前！）短かったな、俺のセカンドライフ・・・

「言っておくけど、純血の吸血鬼の実年齢は外見年齢×10倍だか

ら」

「へ？じゃあお前の実年齢「私の実年齢が、何？」いえ、なんでもないです」

「あら、怒ってないのよ？ウフフフ・・・」

目が笑っていません！！！！

side..Chelsy

あめで遊んでいたところに、扉をノックする音が聞こえてきた。どうせしずりしかいないのだからと、確かめもしないで入るように言った。今思えば、何て迂闊だったのかしら。

「どうかした、の・・・」

「まあ、珍しいこともあるものですね。あなたが私とMs. マーダードールを間違えるなんて」

「カ、カレン・・・」

・・・今日は、厄日？

5 話 目 ― The Fifth ―

side..Chelsy

「カ、カレン・・・」

何故・・・なんで・・・ココにいるの!?

「お、おい。チェルシー?」

隣であめが話しかけてくるけどまったく耳に入らない。

「・・・どうして貴女がココにいるのかしら、シスター・カレン? ローレンスの血統ではない貴女がこの屋敷に入るには主である私の招きがなければならぬはずなのだけど」

「あら、人間嫌いの貴女が騎士と誓約したなんて聞いたら、見ないことには帰るわけにはいきません。それで、貴方のお隣にいるのがそうなのでしょう?」

「へ? 俺のことか?」

「ええ。貴方の名は?」

「小嵐 雨梅だけど」

「・・・ああ、嗅いだ事のある香りなはずです。貴方は雨の日と深い縁があるようですね。この間の雨の日に教会へいらしたでしょう?」

あめとカレンは初対面じゃない?

side..Ame

この前の雨の日?・・・自殺した日か。生きてるんだけど。ん?教会?・・・それって、まさか・・・

「まさか、海沿いにある・・・?」

「ええ、そうです」

「あめ、どういうこと? 貴方クリスチャンだったの?」

「いや、違うけど」

なんで入ったか俺にもわかんないんだよなあ。家も仏教だし、今まで一度も近づいた事もなかったのに。あの時は形だけでも懺悔したかったのだろうということに納得したけど。

「あれ?^{サーヴァント}騎士とか知ってるならアンタも吸血鬼だろ? 教会にいても平気なのか?」

「身体にはなんの不都合も有りませんわ。御優しい方なのですわ、この子とは大違い」

「・・・悪かったわね、余計なお世話よ。だいたいそうだったのは貴女のせいじゃない」

「鍛えようとしていたんですのに。感謝されることはあれど、憎まれる憶えはありません」

「ど・こ・に鍛えるためだけにアマゾンのジャングルに1人置き去りにしたり、ナイアガラの滝から突き落したりする馬鹿がいるっていうのよ!」

「……ありえない台詞が聞こえてきたけど無視だ、無視。とりあえず、チェルシーも大変だったんだと思っておけばいいだろう。」

「……まあ、いいわ。話を元に戻すけど、あめが想像しているほど吸血鬼は弱くないわ。強くもないけど」

「十字架も、聖水も常に持ち歩いてますけど不備を憶えたこともありますし。ニンニクは……むしろMs・ローレンスの好物ですわね。フランス料理などには欠かせませんし」

「夜行性が多いけど、別に日光が苦手という訳ではないし。ホワイトアッシュの杭なんて使わなくても死ぬわよ？ 銀食器シルバーも使っているわね。こう考えると、まったく当たっていないのねえ」

「流水も平気です。血を吸われたところで貧血になるだけですわ。死ぬまで吸われることなど滅多にありません。性的な快楽があると言うのは本当のようですが」

「人間と吸血鬼の間に生まれた子はいるわね。ダンピールと呼ばれるけど」

なんかイメージとずいぶん違うんだな。一気にガラッと変わったよ。

「さて、そろそろお暇ぐちしましょうか。Mr・レイニーデイにも会いましたし」

「え、それって俺？」

「ふうん、貴方にしては合っているんじゃない？ それにしても貴方1人？ いつも居るあの子は？」

「外に居ます。もう1つの目的もありましたから」

「目的……？ まさか、アレ本気だったの？」

「もちろん。さあ、外へ行きましょう？」

アレ？アレって何なんだ？

番外編－The Xmas－（前書き）

少し先の話です。

番外編―The Xmas―

side..The third person

12月24日 クリスマス・イヴである今日は雨梅、チェルシー、しずりで小さいがパーティをしていた。とはいえホームパーティにしては大きいのだが。

「なあ、チェルシー」

「何かしら」

「あのツリーって本物のモミの木なのか？」

「そうよ。たしか・・・カナダからだったかしら」

雨梅の目を惹いたのは高さ5メートルはあるだろうという大きなクリスマスツリーだった。

「さすがお嬢様だな。だけど、まさか吸血鬼がクリスマスパーティをするなんて思わなかったよ」

「まさか。日本人だってクリスマスチャンでなくてもクリスマスをしたりするじゃない？吸血鬼だってしたっておかしくないわ」

12時になるまであと1時間になったところでチェルシーが小さな箱を取り出し雨梅に渡した。

「あめ。これ・・・」

「へ？あ、くれるのか？」

「ええ。開けてみてくれる？」

「おう・・・これ、ペンダント？」

「そう、お父様の形見だったの」

「な!?! そんな大事なものを貰えないって!」

「いいのよ。それ男性用だから私が持っても仕舞っておくしか出来ないから。誰かに着けてもらおうほうが喜ぶわ。椅子に座って? 着けてあげる」

雨梅が椅子に座ると、後ろに回りペンダントを首に着けた。ペンダントに付いたコインのようなものが雨梅の首元でライトを反射して光っている。

「似合ってるわ。やっぱりあめにあげてよかった」

「そうか? ありがとな。俺も用意したんだ、プレゼント」

そう言っ取り出したのは花やリボンの付いた髪飾りだった。

「ちょっと安いから合うかどうか分かんないけど」

「綺麗ね・・・とっても嬉しいわ・・・ありがとうございます」

そう言っ微笑んだチェルシーの顔を見て雨梅は自分の胸が“ドキッ”とするのが分かった。

(な、なんだ!?!? い、妹みたいなモンだろ!?!? なんでドキドキしてんだよ!?!?)

「どうしたの?」

「い、いやなんでもないっ!」

「へんなの。ねえ、着けてくれる?」

「あ、ああ。いいよ。・・・よし! 出来た」

髪飾りを着けたチェルシーはとても綺麗だった。

「大事にするわね」

「う、うん」

「我が主人様、プレゼントガ届イテイルノデアリマス」
「ええ、分かったわ」

届いたプレゼントを見て、雨梅はとても驚いた。大きなリビングが天井まで埋まっていたからだ。

「これはカレンで・・・げっ、クリアウオーターのまで・・・」
「クリアウオーター？」
「気にしないで」

とにかく2人ともお互いからのプレゼントが宝物になったのはまちがいない。
ちなみに、しずりには雨梅がかんざし、チェルシーが口紅をあげました。

番外編—The New Year—

side..The third person

クリスマスパーティーの後、流石というべきか殆どしずり1人で片付けをしていた。雨梅も手伝わなかったわけではなかったのだが、しずりの行動が速すぎて手伝えなかったのだ。そのため、クリスマスの雰囲気も無くなり次に飾られたのは注連縄、門松・・・所謂伝統的な日本のお正月というやつだ。西洋風な屋敷には少々ミスマッチだが。

そうして年もあけて3人は初詣に行こうとしていた。

「準備出来たわ。行きましょう」

「遅いぞ、そんなにかか・・・るのか？お前チェルシー？」

「当たり前でしょ。でなかったら誰なのよ」

「だ、だよなあ」

「ねえ・・・どうかしら、着物。お婆様に着せてもらって以来だからちよっと心配なのだけど」

そういうチェルシーは藍色の着物を着て、普段は下ろしている髪を上げて雨梅があげた髪飾りを付けていた。

（これが、ギャップ萌えてやつか・・・イヤイヤ、変な趣味はありませんか？一般論としてですね・・・）

要するに可愛いということだ。

ただこの間ずっと目はチェルシーを見つめていたため恥ずかしさやいろいろな感情が入り交じりちよつとしたパニックになっていた。(な、なに!!? なんて何も言わないの? そんなに似合ってない? な、なんでもいいからリアクションしてよ!!!!?)

「チェルシー」

「え?」

「似合ってる。可愛い」

「へ? あ、あう……。うん。ありがとう」

周りに男性がいないのと少し気になっている相手から言われたというのもあって顔を真っ赤にさせるには充分な破壊力を持っていた。

(あれ? なんか様子がおかしいな。俺変なこと言ったかな?)

鈍いのはお約束。

「おい、どうした?」

「な、なんでも「閉ジマリ完了デアリマス」キャツ!!」

「我が主人様?」

「さ、さあしずりも来た事だし行きましょう」

「……………」(雨梅を見ながら)

「俺は知らないぞ」

「……………ニブイノデアリマス」

「あっ！そうだ、忘れてた」

「何？忘れ物？」

「違う。挨拶まだだろ？」

「挨拶？そういえばそうね。雨梅、しずり。あけましておめでとう、今年も宜しくね」

「おう、よろしくな。にしても去年はいろんな事がありすぎて驚きっぱなしだったな」

「まあ、仕方なかったんじゃないの？」

「・・・・・・アッ」

「ん？どうした？・・・雪か。道理で冷え込んでるわけだ。寒くないか？」

「大丈夫よ」

「心配御無用デアリマス」

「そうか？じゃあほら」

そう言って2人に手を差し出した。

「この手は何？」

「コケたら危ないから掴んどけ」

「貴方が転ぶなんて事ないでしょうね？」

「平気だって！」

3人のお願ひ事

雨梅の場合

『チエルシーからの小遣いが少しだけでも上がりますように。マジでお願いっ!!!』

チエルシーの場合

『ちょ、ちょっとぐらい意識してくれたって・・・あ、私はべ、別にあめが好きなわけじゃないけど・・・あと50年ぐらい立たないとダメかしら・・・』

しずりの場合

『・・・・・・・・家内安全。・・・・・・・・無病息災』

6 話 目 ― The Sixth ―

Side..A me

「・・・なあ、なんで俺たち隠れてんだ？」

「静かに！気づかれてしまいます」

「そりゃこんなことしてたらな」

俺たちは何故か茂みの中に隠れていた。視線の先には一組の男女。女の子の方は見覚えがあった。二度目に目覚めたときそばにいた子だ。

「おいチェルシー、あの女の子って・・・」

「そういえばまだ紹介していなかったわね。あの子はしずり。まあ、使用人みたいな感じかしら」

「じゃあ隣にいるのは？」

「私の連れですよ」

「じゃあ用事ってなんだ？」

「カレンが馬鹿なこと言い出すから・・・貴女のところの子がしずりを好きだなんて」

「あら、此処へ来るときは嬉しそうなんですもの。分かりやすいのですよ？」

「そんな事の為にココまで来たのか？」

「恋路を応援してあげるのも神に仕えるものとして当然のことでしょう」

「首を突っ込みただけでしょう？それに・・・あの子は、人形なのに」

「そんな事、でしょう？」

なんか・・・複雑そうだ。口を挟むのは止めておこう。

「そろそろ行きましようか。待たせすぎると怪しまれるわ」

「M s. ローレンスも気になるのではないですか」

「五月蠅いわね」

近づいてみると、シスターさんの連れって人は俺より少し上？カッ
コイイけど、優男って感じ？

「ええ、終わりましたよ」

「・・・・・・そうですよ。この方がM s. ローレンスの」

？なんで1人で喋ってんだ？

「・・・・・・カレン。あめが変な目で見てるからちゃんと説明な
さい」

「あら！忘れていましたわ。この子はイレブンです」

「イ、イレブン？日本人だと思ったんだけど」

「勿論、偽名です。少し事情がありました」

「へ、へえ。俺は小嵐雨梅。よろしく」

『よろしく願います』

あれ？頭の中に声が・・・・・・

「驚かれました？イレブンは言葉を話すことは出来ないのですが、その代わりに脳内通信テレパシーを使うことが出来るのです」

『すみません、驚かせてしまって。初めに僕の方から話しかけないと相手に聞こえないものですから』

「いや、ビックリしたただだから。気にしないでくれ」

「そうだわ、しずり。部屋の片づけを頼むわ」

「了解デアリマス」

屋敷の中に入っていくしずりを見つめる目は・・・・・・・・女の勘って馬鹿に出来ないな。

「私の言ったとおりでしたでしょうか？」

「まあ、そうだったわね」

『何がですか？』

「イレブンがM.S. マーダードールを好いているということですよ」

『！！？シ、シスター様っ！！』

「頑張れよ、応援するから。なあ、チェルシー？」

「ええ・・・まあ貴方になら任せてもいいかしら」

『あっ、ええっと・・・』

「そろそろ帰りましょうか。イレブンがショートしてしまいますから」

「じゃあ、また」

「ええ。行きますよ」

『へ？あっ待ってください！』

「もう来なくてもいいわ・・・・・・・・カレンは」

ボソツと言った事は聞かなかったことにしよう……

side…Kallen

新しいMs. ローレンスの従者の方はどんな方かと思っていましたけど、面白そうな方みたいですネ。

「どのように感じましたか？」

『どうって……良い人だと思いましたよ？僕より年下ですよネ』

あの方………Mr. レイニーディなら止められるかもしれませんね………私には出来なかった………悲しみの連鎖を。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9744o/>

血盟の騎士(サーヴァント)

2011年10月8日06時43分発行